

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 24 号, 2021 年, 抜刷 (pp.51-75)

<論文>

パレテアダ土器とはなにか

—近年の発掘調査および遺物分析の結果から—

松本剛 (山形大学)、丸子真祥 (山形大学)、ガブリエル・ビジェガス (国立シカン博物館)、ガブリエラ・デ・ロス・リオス (ランバイエケ複合考古学プロジェクト)

What is paleteada pottery?

From the results of recent excavations and analyses

Go Matsumoto (Yamagata University), Masaki Maruko (Yamagata University), Gabriel Villegas (Sicán National Museum), Gabriela De Los Ríos (Lambayeque Complex Archaeological Project)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』24, 2021, pp.51-75

<論文>

パレテアダ土器とはなにか

—近年の発掘調査および遺物分析の結果から—

松本剛 (山形大学)

丸子真祥 (山形大学)

ガブリエル・ビジェガス (国立シカン博物館)

ガブリエラ・デ・ロス・リオス (ランバイエケ複合考古学プロジェクト)

【要旨】

パレテアダ土器とは、おもに調理や貯蔵などの用途で使われる壺や甕である。文様が刻まれたパドルによって成形される過程で外壁面に文様が刻印されることから、その名がついた。これまでの研究では、おもにその生産現場での調査をもとに、非エリートによってドメスティックな領域で生産され、流通した社会的地位の低い粗製土器であるとみなされてきた。本稿ではパレテアダ土器がもっとも多く出土するランバイエケ文化に焦点をあて、中期シカン期最大の祭祀センターであるシカン遺跡の中心部・大広場での調査の結果にもとづいて、パレテアダ土器の存在を捉え直す。

埋葬複合によって囲まれた大広場では、エリートが祖先を追悼するために大規模な饗宴を開いた。彼らはパレテアダ土器に自らのイデオロギーに直結する文様を刻印させ、社会的ステータスの異なる人々が集まる饗宴でこれを使用した。パレテアダ土器はエリートによるアイデンティティ表出の媒体であった。

【キーワード】

シカン／ランバイエケ、パレテアダ土器、刻印文様、エリート／非エリート、精製土器／粗製土器

【目次】

1. はじめに
2. パレテアダ土器の概要
 - 2-1. 起源と伝播
 - 2-2. 技術的・様式的継続性
 - 2-3. 生産体制と流通
 - 2-4. 刻印文様の類型化
 - 2-5. 先行研究における問題点
3. 大広場出土のパレテアダ土器
 - 3-1. PAS2008 シーズン：エリートによる祖先追悼のための饗宴

3-2. PIACL2016-2019 シーズン：さらなる饗宴跡とパレテアダ土器

4. パレテアダ土器の文様分析

4-1. データ採取および分析の方法

4-2. 本稿で用いる時間基軸

4-3. PAS2008 サンプルにおける文様の復元と分類

4-4. PIACL2016-2019 サンプルにおける文様の復元と分類

5. 考察

5-1. クラス分類による解釈の限界

5-2. クラス分類に代わるアプローチ

6. 結論

7. おわりに

1. はじめに

ランバイエケ文化はきわめて折衷的である。外来もしくは在地の伝統的な文化様式やコスモロジーなどを積極的に取り込み、それらを巧妙に組み替えて新しい文化を作り上げた。本稿で取り上げる「パレテアダ (*paletcada*)」と呼ばれる土器様式もそうした文化的要素のひとつであり、ペルー極北海岸・ピウラ地方から取り込んだものと我々は考えている。ランバイエケ文化ではこの土器に独自の文様デザインを刻印し、様々な場面において調理・貯蔵用に用いた。

これまでのパレテアダ土器研究は、おもにその生産環境や労働組織といった側面に注目してきた。ただし、後述するように、実際にパレテアダ土器の製作現場を同定できた考古学的研究はない。ワカ・シアルーペやパンパ・デ・ブロスのように、これまでに調査されてきた土器工房ではパレテアダ土器の製作に必要な道具が見つかっていないのである。そこで、多くの調査はこの土器の特徴である技術的・様式的継続性に注目し、民族考古学の形でおこなわれた [e.g., Bankes 1985; Collier 1967; Shimada 1976, 1994]。そして、歴史的アナロジーにもとづいて、この土器を非エリートらによってエリート管理外のドメスティックな領域、つまり世帯レベルで生産され、流通した粗製土器とみなしてきた [Cleland and Shimada 1994, 1998]。ところが、刻印文様のなかにはエリートのイデオロギーに直結するモチーフがいくつもみられる。本当にエリートの関与はなかったのか。こうした問いは突き詰められることなく、先送りにされてきた。

本研究は、島田泉率いるシカン考古学プロジェクト (Proyecto Arqueológico Sicán/PAS) が中期シカン期最大の祭祀センターであるシカン遺跡の中心部において2008年に発掘を行った際に、その一員であった松本が大広場 (図1) の発掘を担当し、出土したパレテアダ土器を博士論文研究の一部として分析したことに端を発する。さらに松本は、デ・ロス・リオスとともに、ランバイエケ複合考古学プロジェクト (Proyecto de Investigación Arqueológica Complejo Lambayeque/PIACL) を発足し、2016年から同じく大広場において三度の発掘調査 (PIACL2016-2019) を実施している。これらの調査でも大量のパレテアダ土器片が出土し、それらの分析を行った結果、この土器を「非エリートの土器」とみなす従来の捉え方を再考する必要性が生じた。

詳細な遺物分析の結果、これらのパレテアダ土器はランバイエケエリートが埋葬複合に囲まれた大広場において祖先を追悼するために開いた大規模な饗宴で使用したものであったことが分かってきたのである [松本

2017; Matsumoto 2014a, 2014b]。また、そのなかには「シカン王」のように、分布範囲が祭祀センター内のみに限定されるモチーフが刻印された土器も含まれている。したがって、これまでのようにパレテアダ土器は非エリートの間でしか流通しなかったと考えることには無理がある。大量のパレテアダ土器片が、エリートが開催した饗宴の跡から出土している以上、少なくとも流通・使用に関して、エリートの関与を認めないわけにはいかないためである。

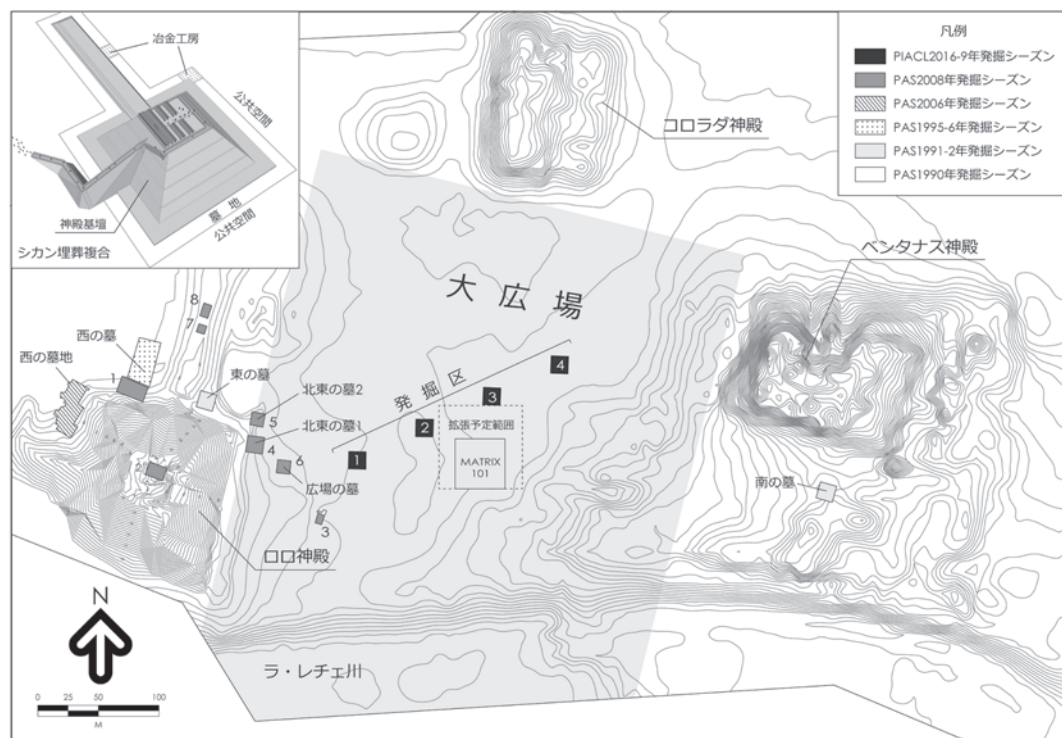


図1 シカン遺跡中心部においてこれまでに発掘された発掘区

我々のプロジェクトの目標の一つは、こうした新しい発見を受けて、パレテアダ土器の存在を捉え直すことである。これは多くの労力と時間を要する長期的な取り組みであり、本稿はそうした研究における最初の成果について論じるものである。本稿では、大広場出土のパレテアダ土器片を対象に実施した刻印文様の復元や、土器の器形・胎土の肉眼分析の結果から、既存の分類手法では捉えることのできなかつたパレテアダ土器の新たな一面に光を当てる。そして、土器片が出土したコンテキストやこれまでのそのほかの分析の結果も考慮しながら、パレテアダ土器の生産・流通・使用について再検討し、この土器がランパイエケ社会においてどのようなものであったかについて、現時点での見解を示す。

2. パレテアダ土器の概要

パレテアダとは、文様が刻まれたパドル（櫂）によって成形され、おもに調理や貯蔵などの用途で使われる土器様式のことである。パレテアダ土器は、ピウラ地方において紀元後 7 世紀にはじめて出現して以来、北海岸

の広い範囲で今日まで作り続けられており、これまで考古学的・歴史学的に記録されてきた [Cleland and Shimada 1998; Day 1971; Lanning 1963; Lara 2021]。本研究では、この製作技術がランバイエケ地方に導入された後に、中期シカン期（紀元後 900～1100 年）のランバイエケ文化において製作・使用されたパレテアダ土器を分析対象とする。

2-1. 起源と伝播

各地域における出現時期と技術的な類似性を考慮すれば、パレテアダ土器がピウラ地方からもたらされたものであることはおそらく間違いない。しかし、それが具体的にどのようなプロセスを経てランバイエケ文化における土器タイプのひとつとなったのかについては、いまだに明らかになっていない。キャスリン・クレランド (Kathryn Cleland) と島田泉 [Cleland and Shimada 1998] は、中期シカン政体の支配力の拡大にともなって陶工がその技術とともに移住させられた可能性を指摘しているが、ピウラ谷でセトルメントパターン研究を行ったホルヘ・モンテネグロ (Jorge Montenegro) [2010] によれば、ピウラ地方にはランバイエケ文化の影響はほとんど見られず、直接統治の可能性は低い。一方、カテリン・ララ (Catherine Lara) [2021] は考古学データの解釈に言語学的アプローチを採用し、パドルによる成形技法はセチューラ語族がはじめて土器製作において導入したものであり、その後、アマゾンから流入してきたタヤン語族によって継承された、と仮説を立てている。しかし、この仮説についても十分なデータが示されているわけではなく、現時点では通説となっているわけではない。

いずれにせよ、パレテアダ土器はピウラ地方からなんらかの形で南に向かって拡散していった。おそらくモチェ V 期後のランバイエケ文化への移行期（紀元後 750～800 年）、もしくは前期シカン期（紀元後 800～900 年）に、セチューラ砂漠を隔てたランバイエケ地方において取り入れられ、さらに南方のビルー谷にかけての地域に広く分布するようになったのだろう [Bennett 1939; Kroeber 1925; Kroeber and Muelle 1942; Lothrop 1948; Shimada 1990:314, Fig. 6]。

2-2. 技術的・様式的継続性

パレテアダ土器は通常、（１）口縁が内側に窄まっている丸い有頸壺、（２）口縁が外側に広がった小さな有頸甕、（３）シンプルな泥漿が塗られた大型無頸甕のいずれかの器形をとる [Cleland and Shimada 1998:135]。いずれの器形の場合においても、型によって成形された基底部の上にコイル状に粘土紐を積み上げ、内壁面にこぶし大の平石 (anvil) を当てて、外壁面をパドル (paddle) で叩くことによって成形・装飾される (=パドル・アンド・アンヴィル製法/paddle-and-anvil technique)。パドル・アンド・アンヴィル製法自体は前期ホライズンにすでに使用されているが、パレテアダ土器が特殊なのは、装飾された土製もしくは木製、石製のパドルを使用することにある。パドルに刻まれた文様が土器の成形時にその外壁面に刻印されることで、独自の見た目が作り出されるのである。そして、平石を当てた内壁面には丸みを帯びた浅い窪みが残る [Kroeber 1925; Kroeber and Muelle 1942; Lanning 1963; Lothrop 1948]。また、有頸壺の肩部にはラグハンドルと呼ばれる穿孔した半円形の突起が取り付けられていることがほとんどで、大型無頸甕の肩部には人や動物の頭部を模したアップリケによる装飾が施されていることが多い。

民族考古学を主とするこれまでの研究から、パレテアダ土器の労働組織や製作技術には長期に渡って高い継続性があると言われている [e.g., Bankes 1985; Collier 1967; Shimada 1976, 1994]。その一方で、考古学的事例にもとづく研究が遅々として進まなかった理由には、このような技術的・様式的特徴により、形状や装飾から変化が

読み取りにくく、土器編年の構築にあまり役立たないと考えられてきたことが少なからず影響していたようである。多くの先史文化における「粗製土器」がそうであるように、パレテアダ土器も考古学者たちの関心を強く惹きつけることはなかった。

2-3. 生産体制と流通

1990年代後半以降、中期シカン期の土器工房での調査が始まると、パレテアダ土器も重要な研究対象となり、広く他の工芸品生産や流通との関連において議論されることが増えていった [e.g., Cleland and Shimada 1994, 1998; Tschauner 2001]。その結果、上に述べた技術的・様式的継続性の一方で、パレテアダ土器の刻印文様には様々なバリエーションがあり、施文方法にもばらつきがあることが分かってきた。このことから、クレランドと島田 [Cleland and Shimada 1994, 1998] は、パレテアダ土器は一元化された管理体制をもたない多様性の高い生産ユニットのもとで作られていたのではないかと推測している。さらに彼らは、現代の土器工房において実施した民族考古学的調査の結果とも合わせて、パレテアダ土器の製作は先史時代から継続して世帯レベルでの労働組織によって支えられてきたと結論づけている。

ランバイエケ谷中流域に位置するパンパ・デ・ブロス遺跡の土器工房を調査したハルトムット・チャウナー (Hartmut Tschauner) [2001] は、パレテアダ土器の製作は、ポリティカルエコノミーに組み込まれた専門の陶工によってではなく、エリートの管理外で農業や漁撈との兼業で従事する陶工によって行われていたと主張している。パンパ・デ・ブロスではパレテアダ土器の製作に必要なパドルと平石が見つかっていないため、当該遺跡で大量に出土するパレテアダ土器は周囲から持ち込まれたものである可能性が高いというのである^(註1)。彼もクレランドと島田 [Cleland and Shimada 1994, 1998] の議論にしたがって、パレテアダ土器はパンパ・デ・ブロスのような土器工房の専門陶工たちほどには専門性の高くない者たちによって、世帯レベルで製作されたと結論づけている。

またクレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] は、考古学および民族考古学的調査によって明らかになった工芸品生産のための生産環境や労働組織の形態などから、中期シカン期の工芸品生産には階層的な3つの領域 (production spheres) があるとし、パレテアダ土器の生産をその最も下位に位置付けている。3つの生産領域とは、(1) エリートとその代理人が直接監督する専門家 (attached specialists) による貴金属製品などの奢侈品生産 (sumptuary production) と、(2) エリートが後援する監督者によって生産と流通を管理された青銅製品や精製土器の型による大量生産 (nucleated workshop production)、(3) ドメスティックな領域での季節的もしくは兼業としてのパレテアダ土器製作 (domestic industry production) である [Cleland and Shimada 1994:336-340; 1998:135-141]。ここで重要なのは、パレテアダ土器の生産や流通にエリートは一切関知せず、非エリート間において物品や労働との交換によってのみ流通したととらえられている点である。しかし、次節に述べるように、そのような「ドメスティックな粗製土器」に「エリート的なモチーフ」が刻印されている。これはどのように解釈すべきであろうか。クレランドと島田はこのことを「シカンにおいてもっともイデオロギー的色彩の強いイメージと、もっとも社会的地位の低い土器クラスの興味深い並列」と形容しているが [Cleland and Shimada 1998:131-132]、それ以上詳しくは論じていない。パレテアダ土器は製作当時の社会において、単純に社会的地位の低い製品とみなされていたのであろうか。

2-4. 刻印文様の類型化

クレランドと島田はさらに、パレテアダ土器に刻印されたバリエーション豊富な文様について詳細な調査を

行っている。彼らは文様をクラス分類したうえで、文様クラスごとに出現のタイミングや出土頻度に違いがあることを明らかにし、文様クラスが編年マーカーとして使用できる可能性を指摘している [Cleland and Shimada 1998; Shimada 1990]。

彼らはまず、ラ・レチェ谷中流域の遺跡（おもにワカ・デル・ブエプロ・パタン・グランデ遺跡 [HPBG] やシカン遺跡）において採集されたパレテアダ土器片をもとに、刻印文様を（1）ロゴ文様（クラス L）、（2）大型幾何学文様（クラス L-G）、（3）連続幾何学文様（クラス G）の3つのクラスに分類した [Cleland and Shimada 1998:129-132]（その他の分類方法については Ishida [1960] や Kroeber and Muelle [1942] などを参照のこと）。ロゴ文様が「シカン（＝ランバイエケ）のイデオロギーに直接関連し、儀式活動の物的痕跡として、信仰や象徴、価値あるオブジェクト、社会政治的な役割などを反映したテーマやオブジェクト」（括弧内筆者）と定義されているのに対して、二種類の幾何学文様は「曲線や四直線の形で表現された抽象的な要素」と定義されている [Cleland and Shimada 1998:130]。たとえばロゴ文様では「シカン王」や橋型双注口壺、神話的な動物などが描かれる一方で、幾何学文様はひとつの文様が大きく（直径4～5センチ）単体で現れるクラス L-G と、小さな同じ文様が連続した形で現れるクラス G に分けられる。クラス L-G には同心円や D 型文様、渦巻きなどが多く、クラス G には直線やジグザグ、四角形・菱形のハッチング文様、連続した三角形、波、歯状文様 (dentate)、フレット（ギリシア雷文のような、縦と横の線が交互に繰り返されるデザイン）などが多い。

こうした分類を行ったうえで、彼らは紀元後 450 年から現代に至るまで（1950 年頃）長期に渡って居住されてきた HPBG での発掘調査をもとに、全 1850 点のパレテアダ土器片のうち 630 点から復元された3つの文様クラス（L・L-G・G）の、中期シカン期前期から後期ホライズンまでの時間的分布を明らかにしている。これによれば、HPBG においてパレテアダ土器がもっとも多く見つかったのは中期シカン期後期（紀元後 1050～1100 年頃）であり、砒素青銅の生産がピークを迎える中期シカン期中期から後期と時期的に重なる。さらに、ロゴ文様のほとんどが中期シカン期前期（紀元後 900～950 年頃）から中期（紀元後 950～1050 年頃）の地層からしか出土しないのに対して、幾何学文様は中期シカン期以降にも多く見られ、時代が下るにしたがってサイズが小さくなっていくとともに（クラス L-G から G への変化）、文様間の隙間も狭くなっていくという。また、クラス G の主なモチーフが登場するのは紀元後 1100 年以前（中期シカン期後期末まで）であり、それ以降に新たなイノベーションはみられないという。したがって、これらの主張によれば、HPBG での文様クラスの変化のほとんどはシカン期のうちに起きたということになる。

2-5. 先行研究における問題点

クレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] のように、パレテアダ土器を「エリート的な文様が刻印された、社会的地位の低い粗製土器」と捉える見方に問題はないのだろうか。或いは、この見方が正しいのであれば、そうした「興味深い並列」はどのような背景のもとに起こったのであろうか。刻印文様に現れる「シカン王」や橋型双注口壺、神話的な動物などを「ランバイエケのイデオロギーに直結するエリート的なモチーフ」とみなすことに異論はないが、土器工房の調査実績が少ない現時点でパレテアダ土器を「社会的地位の低い製品」と断じてしまうことは果たして妥当だろうか。

これまでのパレテアダ土器研究は、その生産現場における生産環境や労働組織といった側面にばかり関心を寄せていたにもかかわらず、実際にパレテアダ土器の製作現場を同定できた考古学的研究はない。チャウナー [Tschauer 2001] が調査したパンパ・デ・ブロスのように、これまでに調査されてきた土器工房では、パレテアダ土器の製作に必要な道具が見つかっていないからである。したがって、パレテアダ土器の「非エリートたち

の土器」という特徴付けは、「あるべきものが考古学的に見つからない」という状況証拠にもとづいていると同時に、民族考古学的な歴史アナロジーに拠っているにすぎない。つまり今後、土器工房の調査で製作道具が発見されれば見方が大きく変化する可能性を残している。

今後は考古学データを今まで以上に重視すべきであるのはもちろんのこと、研究の関心をパレテアダ土器の製作現場だけでなく、それらが使用・廃棄された場所にも向けていく必要がある。これによって、パレテアダ土器が製作されたあとの流通・使用に誰がどのように関与していたのかを推論するための材料をより多く得られるはずである。

3. 大広場出土のパレテアダ土器

本章では、今回の分析対象であるパレテアダ土器の性格を明らかにするため、それらが出土したシカン遺跡・大広場での発掘調査と、その後に行われた各種遺物分析の詳細について述べる。

3-1. PAS2008 シーズン：エリートによる祖先追悼のための饗宴

松本は、島田率いるシカン考古学プロジェクト（PAS）によって2008年にシカン遺跡・ロロ神殿周辺で行われた調査において大広場（図1）の発掘を担当し、3つの発掘エリア（3～5）から出土したパレテアダ土器片の分析を行った〔Matsumoto 2014a:508-519〕。大広場は北から時計回りにコロラダ神殿、ベンタナス神殿、アベヘロ神殿^{（註2）}、メルセー神殿、ロロ神殿の5つのピラミッド型神殿基壇に囲まれた空間（約250 x 550m）で、多少の起伏を除いて目立った構造物はない。5つの神殿基壇のうち、ロロ神殿、ベンタナス神殿、メルセー神殿の3つは特定エリート家系との関連が指摘されており、それぞれの家系はその麓に墓地を建設して祖先を埋葬し、基壇頂上の神殿にて祖先を神とともに祀ったと考えられている〔Shimada 2014〕。

これまでにロロ神殿の麓で行われた地中レーダー探査や埋葬の発掘、生物考古学的分析などにより〔Shimada et al. 2004 など〕、墓は計画的に配置されたことがわかっており、発掘エリア4と5でもエリートを埋葬した2つの立坑墓（北東の墓1および2）が見つかった〔松本 2017〕。副葬された神像付き黒色磨研壺（いわゆるワコレイ）の器形および装飾の特徴から、これらの墓は中期シカン前期から後期にかけての異なる時期に建設されたと推定されている。いずれの墓にも、堅型地下水路を利用した玄室への献酒や遺体改変など、遺体の埋葬後に継続して儀礼を行った痕跡があり、死者と生者との間で儀礼的な交流が継続していたことを示唆している^{（註3）}。

さらにこれらの墓の直上や周囲では、大型のカマドを伴う大規模な饗宴跡が確認された。ラクダ科動物を解体して、頭部と四肢の先を死者のために墓室に供え、残りを饗宴にて食した痕跡が確認されたことから、松本〔2017〕は墓室内の死者と饗宴に参加した生者との間には共食の可能性があった、つまり饗宴は死者を追悼するためのものであったと解釈した。この饗宴跡から焼けた土や大量のゴミ（獣骨・魚骨・貝殻・木の実など）とともに出土したパレテアダ土器片は、調理・貯蔵用として持ち込まれた土器の一部とみられるものである。饗宴はその性格からいって、エリートが深く関与しており、彼らによるスポンサーシップのもとで開かれたと考えるのが妥当であろう。以下に述べる松本による諸分析の結果もこれを示唆している〔Matsumoto 2014a〕。

まず、饗宴で給仕に使われた皿・浅鉢を対象に、製作時に必要な技術的な行程数から質の違いを明らかにするために行った肉眼分析では、質の違いによって、（1）成形以外にほとんど手がかえられていないクラスター1、（2）比較的手の込んだ作りだが無彩色のクラスター2、（3）丁寧な表面仕上げや塗りによる装飾が施された

クラスター3の3つのクラスターに分割できることが明らかになった。松本はこれを饗宴参加者（つまり器の使用者）の社会的な地位の差を反映したものであり、クラスター3が最上位のランバイエケエリートによって使用されたのに対して、クラスター1および2は一部の下流エリートや非エリート（被支配者）たちが使用したと解釈した [Matsumoto 2014a]。大広場での饗宴には、自らの祖先を追悼するために参加していたエリートに加え、さらに他の社会階層に属する人々も招かれた。つまり、祖先信仰儀礼が社会的統合の手段として使われたという考えである [松本 2017]。

では、こうした土器はどこで誰によって作られ、持ち込まれたのだろうか。上記の皿・浅鉢のうち、225点を対象に行った中性子放射化分析では、3つの組成グループ（BDP1～3）が明らかになり、そのうちの2つ（BDP2および3）からは多量の砒素が検出された [Matsumoto 2019]。これはおそらく、マルチクラフト工房にて砒素青銅と土器の並行生産を行っていたことを示している。ランバイエケの工芸品工房は数が限られており、そのなかでもマルチクラフト工房はワカ・シアルーペ（ランバイエケ谷下流域）のみである。これまでの調査によって、この工房ではモチエの文化アイデンティティを持つ職人たちがランバイエケエリートの管理下で土器と砒素青銅製品を同時製作していたことがわかっている [Shimada et al. 2003a, 2003b, 2003c, 2003d; Shimada and Wagner 2007; Taylor 2002]。したがって、皿や浅鉢はクレランドと島田のいう nucleated workshop production の領域で作られていた可能性がきわめて高い [Cleland and Shimada 1998] ^(註4)。

これに対してパレテアダ土器は domestic industry production の領域で作られていたと言われており [Cleland and Shimada 1998]、皿・浅鉢とは異なる生産領域に属していることになる。クレランドと島田の主張が正しいとするなら、同じ饗宴コンテキストで使用されたこれら2つの土器グループはなぜ別々の生産領域で作られていたのだろうか。給仕と調理・貯蔵はそれぞれ別の者たちによって担当され、そこで使われる土器も別のルートで手配されたということなのか。そうではなく、パレテアダ土器も皿や浅鉢とともにワカ・シアルーペのような nucleated workshop production の領域に属する工房で作られていた可能性はないのだろうか。

ここには木製のパドルが考古学遺物として残りにくいことや、陶工が貴重な平石を廃棄することがなかった可能性があることも影響している [Tschauer 2001]（註1を参照）。また、簡易的な肉眼分析によれば、調理用の有頸壺が多く、混和材を含む比較的粗い胎土で作られ、少々焼きが甘いものに対して、貯蔵用の大型無頸甕は混和材の少ない目の細かい胎土で作られ、固く焼き締められていた。皿・浅鉢と同様にパレテアダ土器の形状（とくに口縁部）にはバリエーションがあるものの、胎土の種類は限られているように見える。現時点では、我々は皿・浅鉢とパレテアダ土器を一括して同じ土器工房で作られていたのではないかと推測している。ただし、クレランドと島田が指摘する生産領域の区分が明確にあったのかどうかを確かめるためには、今後、パレテアダ土器を皿や浅鉢と同様に中性子放射化分析にかける必要がある。

いずれにせよ、パレテアダ土器はエリートと非エリートが混在する饗宴の場で使用された。さらに、各種土器の内壁面から採取した土壌サンプルのデンブレン粒分析から、アカ（トウモロコシの醸造酒）が消費されていたことも明らかになっている [Matsumoto 2014a]。貯蔵用の大型無頸甕（パレテアダ土器）はアカの調理・醸造に使用され、大広場ではエリートと非エリート、死者と生者が混在するなか、醸造された酒が振舞われたのであろう。このようなコンテキストで使用されたパレテアダ土器を、生産や流通にエリートが一切関与しないドメスティックな粗製土器ととらえ、「もっとも社会的地位の低い土器クラス」と特徴付けることには問題があると言わざるをえない。

3-2. PIACL2016-2019 シーズン：さらなる饗宴跡とパレテアダ土器

PAS において大広場の発掘を担当した松本は、2016年に新たにランパイエケ複合考古学プロジェクトを発足し、デ・ロス・リオスとともに大広場での調査を継続した。埋葬複合としてのピラミッド型神殿基壇に囲まれたこの大広場がどのように使用されていたのか。また、それぞれの神殿基壇を有していたエリート家系間の関係はどのようなものであったのか。そのような問いをもって発掘調査は行われた。2016年から2019年までに行われた3度の発掘シーズン（PIACL2016-2019）では、ロコ神殿とベンタナス神殿を結ぶ直線上に等間隔に4つの発掘区（発掘区1〜4）を設けて発掘を行ったところ（図1）、以下に述べるように多くの新しい発見があった [Matsumoto y De Los Río 2019]。

一見「何もない平らな空間」に見える大広場であるが、その中央近くには直径約70メートル、深さ7メートル以上の窪地があり、窪地内部の堆積層の分析から、おそらく大規模なエル・ニーニョ現象に起因する大雨や洪水の時期にその最深部（発掘区2）で人身供犠が行われていたことがわかった [松本 2019; Matsumoto et al. 2021]。遺体は切り口のはっきりしない土坑に折り重なるように無造作に投げ込まれていた。骨学分析の結果、この儀礼的暴力の犠牲となったのはすべて男性であったことが判明した。遺体のなかには、頭部を切断されたり、供物とともに燃やされていたものもあった。窪地の西側の縁（発掘区1）で見つかった、日干し煉瓦でできたテラス付きの低い基壇は、こうした人身供犠のプロセスを見物するための櫓のようなものだったかもしれない。

一方、窪地の東側の縁（発掘区3および4）では、冶金活動や埋葬、大規模な饗宴、埋納儀礼など、様々な活動の痕跡が確認された [Matsumoto y De Los Río 2019]。発掘区3では、マルチクラフト工房であるワカ・シアルーペで見つかったものと同じ構造をもつ、大型無頸甕を逆さにした窯とともに、石臼（バタン）や石鎚、金属片、鋳滓が貼り付いた土器片などが見つかり、冶金工房跡と同定された。また、その床面からはモチエ様式（頭を南に向けた伸展葬）で埋葬された人物の墓が豪華な副葬品や供物の貯蔵庫とともに出土した。副葬品と供物で合わせて45点もの磨研壺が含まれ、そのうち18点がワコレイであった。このワコレイの多さはきわめて異例である。顔を辰砂で塗られ、鼻飾りをつけたこの人物の遺体は丁重に扱われていた。饗宴跡からは PAS2008 シーズン同様、パレテアダ土器片や皿・浅鉢とともに夥しい量のゴミ（動植物や魚介類の遺骸）が出土した。また、饗宴コンテキスト内において、パレテアダ土器から人や動物の頭部を模したアップリケを切り取ったり、有頸甕の頸部を切り落としたものを埋納するという儀礼的行動が繰り返し確認された。つまり、パレテアダ土器は調理・貯蔵のための道具であるだけでなく、儀礼的破壊行為の対象でもあった。また、ヒトの下顎などが見つかったことから、カニバリズムが行われていた可能性も否定できない。

なお、発掘区2の土器を分析するにあたって、注意しなければならないことがある。大広場中心部で見つかった窪地に堆積していた土砂は、堆積学的分析から、そのほとんどが大雨やそれに伴う洪水によって流れ込んだものであることが明らかになった。したがって、これに含まれる自然遺物・人工物は、窪地に隣接するエリアで行われていた活動の結果残された、もしくは生じたものであり、土砂に巻き込まれて窪地に流れ込んだと考えるのが妥当である。すなわち、発掘区2の居住面との関連から内部で行われたことが明らかな生贄儀礼などを除き、包含層は基本的にすべて二次的な堆積によるものであり、一次堆積からは時間的なギャップがあるだけでなく、粗い時間単位で「均されてしまっている」ことを忘れてはいけない。パレテアダ土器について考察するにはこれらのことを踏まえて、解釈を行わなければならない。その文様変化について論じる際には、本来なら複数の時期に細分可能だったものが、同時期としてまとまって出土している可能性を、出土コンテキストについて論じる際には、それが発掘区2内での使用・廃棄のパターンを示すものではないことを十分に考慮すべきである。

4. パレテアダ土器の文様分析

パレテアダ土器の性格をさらに明確にするため、ここからは過去計 4 回の発掘シーズンにおいて出土したパレテアダ土器の刻印文様の分析について論じたい。

4-1. データ採取および分析の方法

パレテアダ土器の分析は (1) ロロ神殿の東側麓に位置する発掘エリア 3~5 (PAS2008) と (2) 大広場中心部に位置する発掘区 2 および 3 (PIACL2016-2019) から出土した土器片を対象として、大きく 2 度に分けて実施された。前者においては全 865 点のうち 657 点 (76%)、後者においては全 9,180 点のうち 1,363 点 (14.8%) が分析対象となった。前者は松本が博士論文研究において分析を行い [Matsumoto 2014a]、後者は丸子が卒業論文研究として分析を行った [丸子 2020]。

データ採取には、時間効率向上のために拓本技術を採用した^(註 5)。分析対象となったパレテアダ土器片は総じて細かく断片的であった。当然のごとく、これらの土器片から写し取った文様の拓本にも同じことが言える。拓本のなかには、パドルに刻まれた文様の全体像を示すものはほとんどなく、断片的な拓本から復元しなければならなかった。パレテアダ文様の同定法は基本的には指紋検査法 (dactyloscopy) と同じ原理で、類似していると思われる文様の断片を重ね合わせていくことによって、元の文様デザイン全体を推定した。

なお、復元された文様をひとつのデザインとして定義する際には少々注意が必要だった。たとえば同じパドルを使っても、それを打つときの衝撃の強さや角度、あるいは土器表面の可塑性などに起因する一定範囲の変動 (たとえば文様の線幅、間隔、曲率の微妙な違い) が生じるためである。それでも実際には、デザイン全体のサイズや構成など、ある文様と別の文様を区別するのに役立ついくつかの違いが見つかった。

4-2. 本稿で用いる時間基軸

分析結果について論じる前に、本稿における編年観を明確にしておきたい。まず、2008 年以降の大広場内での発掘において次第に明らかになったことであるが、中期シカン期の黒色磨研壺 (ワコレイ) の変化を

表 1 ワコレイ編年と較正年代のずれ

エリア	土層	較正年代	ワコレイ編年における黒色磨研壺の時期的特徴
3	OS7L1	calAD 1034-1206	「中期シカン期前期」
4	OS11	N/A	「中期シカン期後期」
5	OS10	calAD 1030-1202	「中期シカン期後期」

層位ごとに詳細に観察しても、必ずしも島田 [Shimada 1990:328, Fig. 18] の土器編年 (以下、ワコレイ編年) どれにすべての変化をとらえることはできない。島田は注口や本体、台座など、各部分の高さが増すことで土器全体のプロポーシオンが変化していくと指摘するが、大広場では「中期シカン期前期」(紀元後 900-950 年頃) から「中期シカン期後期」(紀元後 1050-1100 年頃) までの異なる時期を示す土器片が混ざって出土した。島田のワコレイ編年における中期シカン期前期と中期シカン期後期では 100~200 年ほどの開きがあるはずであるが、表 1 に明らかなように、エリア 3 および 5 においてワコレイが出土したのと同じ地層から採取した炭化物の較正済み放射性炭素年代は、ほぼ同時代と見なしてよいものであった。較正年代はほとんど同時代だが、土器の特徴はまったく違う。2016 年以降の発掘でもこうした状況が続いているため、本プロジェクトでは中期シカン期の細分化はあきらめ、前・中・後期シカンの三分割にとどめている。したがって、中期シカン期内での細かな時期合わせは放射性炭素年代に頼らざるを得ない。

幸いなことに、近年ではベイズ推定による放射性炭素年代の精緻化の試みが盛んになっており、OxCal などのフリーソフトによって年代モデリングが簡単に行えるようになってきている。モデリングの際に分析試料の層位情

表2 大広場・発掘区2の較正年代と出土したパレオアダ土器（※ OS12は発掘区3のOS9と同時代）

発掘区	層位	モロリ年代	パレオアダ総数	拓本数	% (拓本総数)	復元数	復元率
大広場・発掘区2	L3	未測定	2	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	L4	未測定	25	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	OS8	未測定	2	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	L9	未測定	5	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	OS9	未測定	0	—	—	—	—
大広場・発掘区2	L10	未測定	15	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	OS10	calAD 1145-1170 (1σ)	365	342	93.7%	200	58.5%
大広場・発掘区2	L11	未測定	147	136	92.5%	103	75.7%
大広場・発掘区2	OS11	calAD 1140-1160 (1σ)	48	13	27.1%	9	69.2%
大広場・発掘区2	L12	未測定	139	109	78.4%	54	49.5%
大広場・発掘区2	OS12	calAD 1130-1155 (1σ)	144	97	67.4%	59	60.8%
大広場・発掘区2	L13	未測定	225	108	48.0%	62	57.4%
大広場・発掘区2	OS13	未測定	37	18	48.6%	10	55.6%
大広場・発掘区2	L14	未測定	10	5	50.0%	2	40.0%
大広場・発掘区2	OS14	未測定	19	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	L15	未測定	1	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	OS15	未測定	1	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	L16	未測定	6	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区2	OS16	未測定	0	—	—	—	—
大広場・発掘区2	L17	未測定	0	—	—	—	—
大広場・発掘区2	L18	未測定	0	—	—	—	—
合計			1,191	828	69.5%	499	60.3%

表3 大広場・発掘区3の較正年代と出土したパレオアダ土器（※ OS9は発掘区2のOS12と同時代）

発掘区	層位	モロリ年代	パレオアダ総数	拓本数	% (拓本総数)	復元数	復元率
大広場・発掘区3	OS1	未測定	5	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	L2	未測定	8	1	12.5%	1	100.0%
大広場・発掘区3	OS2	calAD 1150-1175 (1σ)	495	267	53.9%	214	80.1%
大広場・発掘区3	L3	未測定	823	2	0.2%	2	100.0%
大広場・発掘区3	OS2.5	未測定	1	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	OS3	calAD 1150-1170 (1σ)	478	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	L4	未測定	36	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	OS4	calAD 1145-1160 (1σ)	104	2	1.9%	2	100.0%
大広場・発掘区3	L5	未測定	41	3	7.3%	3	100.0%
大広場・発掘区3	OS5	calAD 1145-1160 (1σ)	256	3	1.2%	2	66.7%
大広場・発掘区3	L6	未測定	345	27	7.8%	18	66.7%
大広場・発掘区3	OS6	calAD 1140-1155 (1σ)	1,047	2	0.2%	2	100.0%
大広場・発掘区3	L7	未測定	371	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	OS7/f2	calAD 1135-1155 (1σ)	186	3	1.6%	3	100.0%
大広場・発掘区3	L8	未測定	865	10	1.2%	10	100.0%
大広場・発掘区3	OS8	未測定	133	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	L9	未測定	73	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	OS9	calAD 1130-1155 (1σ)	402	3	0.7%	3	100.0%
大広場・発掘区3	L10	未測定	145	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	F3	未測定	0	—	—	—	—
大広場・発掘区3	F4	未測定	4	0	0.0%	0	—
大広場・発掘区3	OS10	calAD 1125-1155 (1σ)	99	0	0.0%	0	—
大広場・発掘区3	L11	未測定	80	1	1.3%	1	100.0%
大広場・発掘区3	OS11	calAD 1115-1155 (1σ)	45	12	26.7%	9	75.0%
大広場・発掘区3	L12	未測定	113	2	1.8%	2	100.0%
大広場・発掘区3	F5	未測定	519	4	0.8%	3	75.0%
大広場・発掘区3	OS12	calAD 1100-1150 (1σ)	50	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	L13	未測定	27	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	OS13	calAD 1070-1150 (1σ)	18	1	5.6%	1	100.0%
大広場・発掘区3	F6	未測定	40	1	2.5%	0	0.0%
大広場・発掘区3	L14	未測定	21	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	OS14	calAD 1045-1150 (1σ)	15	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	L15	未測定	117	0	0.0%	—	—
大広場・発掘区3	L16	未測定	126	12	9.5%	9	75.0%
大広場・発掘区3	OS16	未測定	88	29	33.0%	10	34.5%
大広場・発掘区3	L17	未測定	42	41	97.6%	23	56.1%
大広場・発掘区3	F7	未測定	1	1	100.0%	0	0.0%
大広場・発掘区3	F8	未測定	12	2	16.7%	1	50.0%
大広場・発掘区3	OS17	未測定	7	7	100.0%	5	71.4%
大広場・発掘区3	L18	未測定	19	19	100.0%	10	52.6%
大広場・発掘区3	OS18	未測定	39	39	100.0%	22	56.4%
大広場・発掘区3	L19	未測定	5	5	100.0%	2	40.0%
大広場・発掘区3	OS19	未測定	34	34	100.0%	13	38.2%
大広場・発掘区3	L20	未測定	2	2	100.0%	1	50.0%
大広場・発掘区3	OS20	未測定	0	—	—	—	—
合計			7,337	535	7.3%	372	69.5%

報（つまり新旧関係）を制約条件として付与すれば、モデル年代は条件を満たすように年代幅が絞り込まれ、精度を上げることが可能である。したがって、本プロジェクトでは放射性炭素年代測定とベイズ推定によるモデリングによってこれまでの編年の見直しを進めており、本稿で用いる時間軸もこうしたモデル年代にもとづいている。

このようなモデリングの結果、発掘区2および3で採取した炭化物から得られた放射性炭素年代からは、もっとも狭いもので時間幅20〜30年ほどのモデル年代(1σ)が得られ、異常値判別の結果も問題なかった(表2および3)。これらのモデル年代によれば、これまでのワコレイ編年でいう「後期シカン期」にあたる12世紀に入っても「中期シカン期」の土器が使用され続け、大広場では埋納や供犠などの儀礼活動や冶金活動が行われ、大規模な饗宴が12世紀の後半まで開かれていたことになる。これ以上は本論からは逸れるため詳しくは論じないが、中期シカン様式の黒色磨研壺(ワコレイ)が、中期シカン期と後期シカン期の画期である紀元後1100年を超えても出土することは間違いなく、政体衰退を前提とする中期と後期の時期区分 [Shimada 1990] については再考の余地があることがすでに明らかになっている。

以上を踏まえれば、クレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] による、ワコレイ編年にもとづくパレテアダ文様クラスの出現タイミングについての議論は、飽くまでHPBGに限定して捉えるべきであり、中期シカン期の細分化が不可能なシカン遺跡と比較することは難しいということになる。

なお、発掘区2の土層が基本的には自然イベントに起因する二次堆積であることから、発掘区3の土層との間に堆積のタイミングという点において時間的なギャップが生じ、時期区分の均質化が起こることはすでに述べたとおりである。しかし、年代測定の際に使用した試料は、攪乱された包含層内の炭化物ではなく、それらに挟まれた居住面の上で行われた(おもに火を使った)儀礼跡の掘り込みのなかから採取したため、モデル年代そのものは二次堆積による影響を受けていない。また、ベイズ推定による年代モデリングを行った際に、空間的に隔てられた二つの



図2 復元された128デザイン (PAS2008 発掘エリア3〜5)

発掘区(発掘区2および3)の年代シークエンスを、両者に共通して確認できる(冶金活動で生じた)砒素を含

む地層を同時代性を示すキー層として繋いでみたところ、異常値判定でも問題なく、統計学上、高い整合性が取れたモデルとして評価された。包含層に含まれるパレオダ土器が時期区分の均質化の影響を受けていることさえ考慮していれば、表2に示した発掘区2の層序とモデル年代は、そのまま受け入れて問題ないといえる。

4-3. PAS2008 サンプルにおける文様の復元と分類

松本は、PAS2008 シーズンにおいて3つの発掘エリアから出土した全865点のうち657点(76%)のなかから128種類の文様デザインを復元した。また、時間的な制約から分析対象には含まれなかったが、発掘エリア6出土の土器片には、カニや「シカン王」など、他のエリアとは大きく異なる独特のモチーフが刻印されていることも確認されている [Matsumoto 2014a:885-889, Appendix F]。なかでも「シカン王」モチーフは興味深く、クレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] も指摘したとおり、シカン遺跡の中心部からしか出土していない。

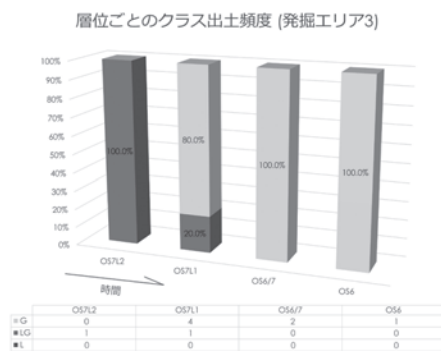


図3 発掘エリア3の文様クラス出土頻度
(※ OS7/1 出土の土器は「中期シカン前期」)

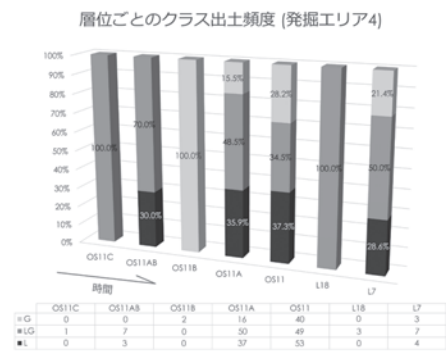


図4 発掘エリア4の文様クラス出土頻度
(※ OS11 出土の土器は「中期シカン後期」)

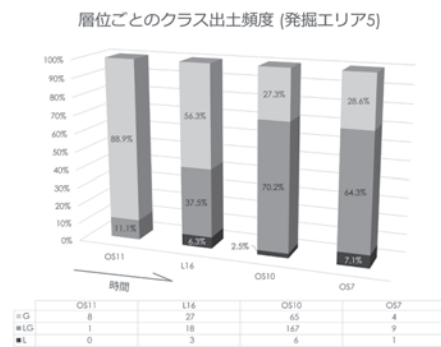


図5 発掘エリア5の文様クラス出土頻度
(※ OS10 出土の土器は「中期シカン後期」)

さらに、復元された文様をクレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] のクラス分類にしたがってクラス L・L-G・G のいずれかに分類し、それぞれのクラス内で同一モチーフを扱っていると思われる、ばらつきはありつつも互いに類似する文様を 29 のグループ (たとえば「神話的な動物」や「同心円」、「波」など) としてまとめた (図2)。ただし、その類似性から指示対象物が明らかなロゴ文様 (たとえば双注口壺やナイベ) とは異なって、幾何学文様のグルーピングはより恣意性の高いものとなる。たとえば円形文様には、一重のものから、同心円状に四重に重なるものまであり、それらのなかには単に円が重なったものと、

点や十字、三角の突起、放射状に伸びる直線や曲線などで装飾が加えられているものがある。円形文様では円が何重であるかを基準にグルーピングを行っているが、他のグループについてもすべて文様間の共通点をもとにしており、あくまで分析者の主観による恣意的なものであるために、当然、グルーピングの仕方は他にもあ



図6 復元された173デザイン (PIACL2016-2019 シーズン/発掘区2より出土)

4.4. PIACL2016-2019 サンプルにおける文様の復元と分類

丸子は、PIACL2016-2019 シーズンにおいて発掘区2および3から出土したパレテアダ土器の文様分析を担当した。分析対象である全1,363点の土器片のうち、828点が発掘区2から、535点が発掘区3から出土したものである。発掘区2出土の828点のうち、499点(60.3%)を173種類の文様デザインとして復元し(表2)、類似したモチーフごとに33のグループに分類した(図6)。グルーピングの基準は、松本が行ったグルーピング

り得る。

文様の復元・分類に加えて、松本は個々の文様デザインを出土層位順に並び、その頻度を明らかにする試みも行った。前節で触れたように、大広場出土の土器に関して、ワコレイ編年にもとづいて中期シカン期を細分化し、HPBGと同様の時期名称をもって出現タイミングを示すことは不可能であるが、層序にもとづいて文様クラス間での相対的な順序を明らかにすることはできる。図3~5に示した結果は、ロゴ文様(クラスL)の方が幾何学文様(クラスL-GおよびG)よりも早い時期に出現するというクレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] の主張とは相容れないものであった。

たとえばエリア5では、もっとも早い時期にクラスLは皆無で、クラスGが大部分を占めている。以降、クラスLが割合を増加させているのに対して、クラスGはむしろ減少している。また、エリア4でもクレランドと島田がいうパターンは見られず、エリア3は出土点数が9点と少なく、そもそも議論のしようがない。ただし、厳密に言えば、同じ文様を持つ複数の土器片が同一の土器を構成している場合も多いうえに、同一個体の識別は不可能である。また、新しい土層の出土土器のなかに古い土層の土器が混入した可能性なども否定できない。このような状況を考慮すると、出土頻度に関する上記の議論は、パレテアダという土器タイプの総体としての動態を捉えきれているとはいえない。

と同じで、文様間の共通点にもとづいて
いる。文様クラスごとの内訳は、クラス
Lが13種類、クラスLGが66種類、ク
ラスGが94種類となった。一方、発掘
区3出土のパレテアダ土器片は、535点
のうち372点(69.5%)を127種類の文
様デザインとして復元し(表3)、類似
したモチーフごとに29のグループに分
類することができた(図7)。文様クラ
スごとの内訳は、クラスLが24種類、
クラスLGが50種類、クラスGが53種
類となった。

これらのなかには、PAS2008のエリア
3~5では見られなかった文様が多く含
まれている。その最たるものが「シカン
王」文様である。ロコ神殿東側麓近くの
エリア6でも出土していることはすで
に触れたとおりが、出土点数はほんの数
点であった。PIACLによる発掘ではいく
つものバリエーションとともに、より多
く見つかった。バリエーションの多さとい
う点においては、橋型双注口壺がとく
に目を引く。エリア3~5からのサンプルでは胴部は塗りつぶされていたが(図2)、発掘区2および3からの
サンプルでは、中空になっていて、円形文様が描かれていたり、その上部が点によって装飾されているものもある(図6の3-Hおよび図7の7-L~7-N)。このように、パレテアダ文様は試料数が増えるほどに、そのバリエーションを増していく印象を受ける(註6)。(技術的な側面も含めた)こうした多様性に注目して、パレテアダ



図7 復元された127デザイン (PIACL2016-2019 シーズン/発掘区3より出土)

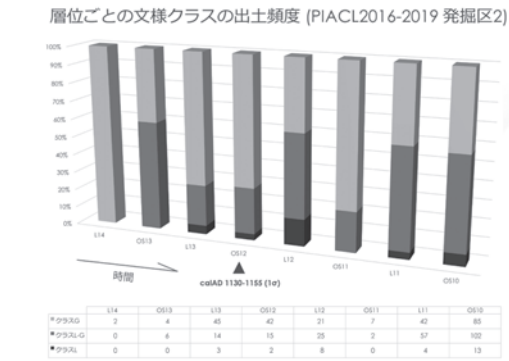


図8 発掘区2の文様クラス出土頻度

土器を「一元管理のもとで作られたものではない」とする点においては、クレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] の考え方に賛同できる。

復元・分類ののち、丸子は松本による分析と同様に、文様デザインの編年マーカーとしての可能性を検証するため、それらを出土層位順に並べ、その頻度を集計した。ただし、先に述べた土器編年の問題から、ワコレイ編年にもとづく従来の時期区分は使わず、土層ごとに集計した。3つの文様クラスそれぞれの出土頻度を土層ごとにカウントしたのち、それぞれの文様クラスの割合を図8および9に示した。

これらの図から明らかなのは、文様クラスの出現時

期の違いや土層ごとの割合の変化に関して、やはりクレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] が主張するような特徴的なパターンは見られないということである。いずれの発掘区においても、クラス G は早い時期から高い割合を占めており、逆にクラス L は遅い時期に高い割合を占める傾向にある。つまり、上述した PAS2008 データ (図 3~5) と同じ結果となった。クレランドと島田が主張するパターンは、HPBG 遺跡出土のパレアダ土器にのみ見られる現象なのかもしれない。ただし、膨大な時間を要する文様の復元は現在も継続中であり、表 2 および 3 に明らかなように、復元できている文様の数はまだまだ少ない。今後、復元された文様の数が増えていくにしたがって、結論が変わってくる可能性があることは否めない。

なお、松本が PAS2008 データを用いてできなかったパレアダ土器の同一個体の識別は、今回もできていないし、おそらくこれからも難しいと思われる。実際にこれを実現するとすれば、文様復元ののち、すべての土器片を理化学的に詳細に分析し、粘土のタイプやレシピ、焼成温度などを明らかにすることによって、どの土器片が同じ個体を構成していたかを検証しなくてはならない。不可能ではないが、想定される作業量と予算、費用対効果などを考慮すると現実的ではない。

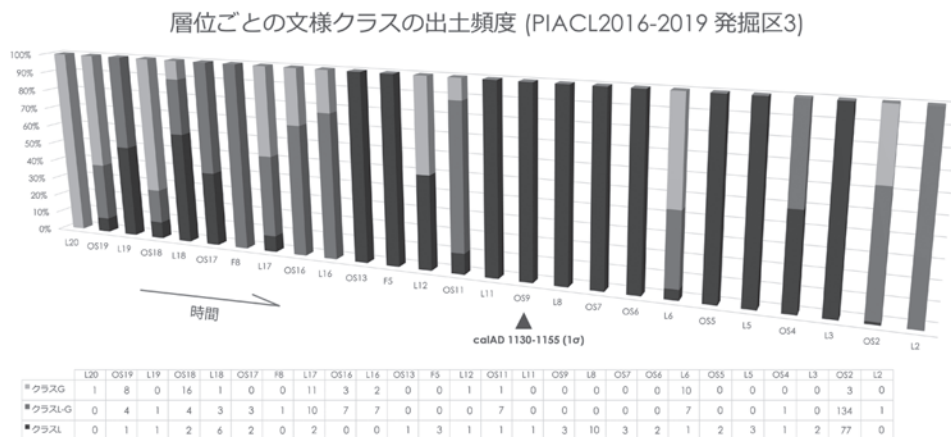


図9 発掘区3の文様クラス出土頻度

以上、松本と丸子による分析の結果、パレアダ文様のさらなるバリエーションが明らかになるとともに3つの文様クラス間には、クレランドと島田が主張するような出現時期の明確な差異はなく、編年マーカーとしての役割も期待できないことが明らかになった。彼らが主張するパターンは、おそらく HPBG のみに限られる現象を捉えているのであろう。

5. 考察

本章では、上記のパレアダ土器の分析結果を総括するとともに、これまでの分析方法を批判的に見直し、新たな視座を示す。

5-1. クラス分類による解釈の限界

松本と丸子による文様分析では、クレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] によるクラス分類を踏襲した

が、すべての文様がうまく分類できたわけではない。たとえば、ロゴ文様と幾何学文様の境目は必ずしも常に明確ではなく、とくにクラス L と L-G の区分は曖昧である。

クレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] の定義にしたがって我々が幾何学文様として分類したものの中には、いくつかのバリエーションをもつ同心半円や同心三角形の文様 (図 6~7 の「装飾付き同心半円」および「装飾付き同心三角形」) がある。我々はこの、エリートが儀礼などの際に着用した頭飾りを表わしたものではないかと考えている。図 7 の文様 9-A はそのような頭飾りの典型で、半円から放射状に伸びる直線は、頭飾りに付けられた鳥の羽 (もしくはそれを模した金属製羽) を様式化したものであろうと考えられる [増田ら 1994:72-73, Fig. 6]。黒色磨研壺や土偶によく見られる「シカン王」を象った頭像も、こうした半円型の頭飾りを付けた状態で描かれることが多い。実際、ロゴ文様の「シカン王」モチーフ (図 7 の 1-A~C) において人物が付けている頭飾りともよく似ている。このように、ロゴ文様の「シカン王」の頭飾りと幾何学文様の頭飾りはほとんど見分けがつかない。

また、「胴体から切り離されたネコ科動物の頭部 (disembodied feline head)」 (図 2) はその上部に、ペルー南海岸でイカーパチャカマク期からイカ期への移行過程で少しずつ様式化されていくネコ科動物の頭部のモチーフ [Lyon 1966:62, Plate VI] に酷似した要素を含んでいる。元のモチーフが何であったのかを推測できたので今回はクラス L に分類したが、様式化の結果、幾何学文様になったとみなせばクラス L-G となる。逆に、クラス L-G の円文様には太陽や星のアイコンに見えるものもあり、様式化の過程のどこで線を引くかによって、両者の区分は流動的なものとなり、客観的な基準にもとづく分類が難しくなる。さらには、上述のように、橋型双注口壺の胴部が円文様になっていて、ひとつの文様に 2 つのクラスが混在しているケースもある (図 6 の 3-H および図 7 の 7-L~7-N)。つまるところ、クラス分類は飽くまで現代の考古学者が分析のために生み出した恣意的なもので、当時の人々の認識においても同じように区別されていたかは甚だ疑問である。

さらに、クラス分類における<ロゴ文様/幾何学文様>という区分のうえに、<エリート/非エリート>という解釈上の区別を重ね合わせることも、同様に考古学者によるきわめて恣意的な線引きであるといえる。確かにクラス L で描かれるモチーフには、「シカン王」のようにエリートそのものや、橋型双注口壺のようにエリートの直接的な関与が示唆されるものが多い。とはいえ、これと対比させて幾何学文様であるクラス L-G および G を非エリート的であると考えすることは果たして妥当だろうか。クレランドと島田は、中期シカン期後期にパレテアダ土器の出土頻度がピークを迎え、その 8 割以上をクラス G が占めることを踏まえて、同様にピークを迎える砒素青銅の大量生産との関連を示唆し、クラス G 文様が刻印されたパレテアダ土器が精錬活動に従事していた工人たち (非エリート) の食事の準備に使われた可能性を論じている [Cleland and Shimada 1998:129, 133, Fig. 27]。しかし、<ロゴ文様/幾何学文様>の差異を、使用者である<エリート/非エリート>の差異に還元できるようなデータが十分に示されているわけではない。<ロゴ文様/幾何学文様>の区分は、飽くまで編年のために行われた文様分類の結果できあがった型式として扱いにとどめるべきである。

5-2. クラス分類に代わるアプローチ

上記のようなクラス分類にもとづく解釈の限界は、それに代わる新たなアプローチの必要性を強く示唆して

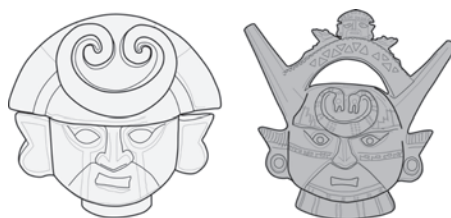


図 10 三日月形の頭飾りを付けた人物 (Zevallos Quiñones 1990:21-22 をトレースしたもの)

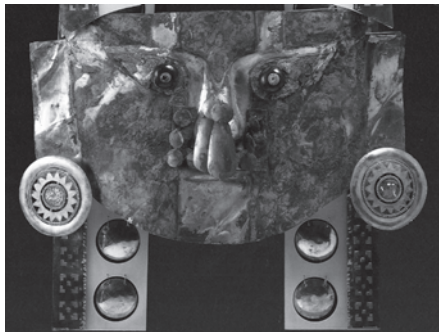


写真1 装飾付き同心円文様によく似た耳飾り (義井豊撮影)

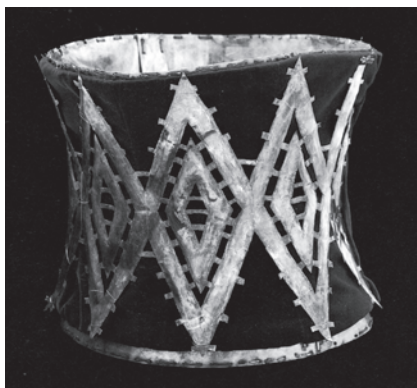


写真2 同心菱形文様によく似た切り抜き (義井豊撮影)

製ケロには、(1) クラスLの「職杖をもった人物」(図6の2-A) や(2) クラスL-Gの装飾付き同心半円(図7の9-A)、(3) クラスGの波モチーフなどに似た様々なデザイン要素がひとつの遺物のなかに見られる(写真3)。

このように見ると、多くの文様デザイン(とそれを構成する要素)が、パレテアダ土器の枠組みを超えて、ランバイエケエリートにまつわるほかの遺物タイプや美術表現に関連して現れることがわかる。そして、クレランドと島田[Cleland and Shimada 1998]によって「非エリートの文様」とみなされた幾何学文様にも、ランバイエケエリートのイデオロギーに直結するデザインモチーフが数多く存在することも明らかである。パレテアダ文様はむしろ、少なくとも中期シカン期においては、ひとつの美術表現を構成しうる同時代のデザイン要素であり、エリートによってアイデンティティ表出の媒体として使われたのではないだろうか。

一方、エリートとの関連が明らかでないのは、個々の構成要素

いる。我々は、個々の刻印文様に含まれるデザイン要素が、パレテアダ土器という枠を超えてほかの媒体にも現れることに注目し、それがどのようなコンテキストなのかを見ていくことで、当時における個々のデザイン要素の使われ方・捉えられ方を明らかにしようと試みた。

たとえば、図7の半円内に両先端が丸まった三日月のようなデザインが灑された文様11-Aは、ホルヘ・セバージョス・キニョーネス(Jorge Zevallos Quiñones) [1990:20-22]が陶製の柱頭飾りとして紹介している「神話的な人物の頭部(cabezas míticas)」が付けている頭飾りのデザインとまったく同じものである(図10)。さらに視野を広げて、他の幾何学文様を見てみると、クラスL-Gの同心円モチーフのなかのデザインの多くは、ロロ神殿「東の墓」から出土した耳飾りにとともよく似ているし[増田ら1994:10-11](写真1)、同じく「東の墓」から出土した「切り抜き文様付き黄金製円筒王冠」[増田ら1994:78, Fig. 12]には大きな二重の同心菱形のデザインが灑されている(写真2)。また、クラスGの直線をともなう波デザインのいくつかは、同じく「東の墓」から出土した、金板を切り抜いた王冠飾りの波文様に酷似している[増田ら1994:76-77, Figs. 9-11]。黒色磨研壺の台座に描かれる幾何学文様にも波文様が多くみられる。さらに、我々の発掘において出土した遺物のなかには、3つの文様クラスすべての要素を含むものもある。大広場内の発掘区3で出土した「シカン王」を浮彫で描いた土



写真3 シカン王を浮彫で描いた土製ケロ (松本剛撮影)

が小さく単純な連続幾何学文様の一部（「線・格子」など）のみで、これらはチム一期以降にも現れる。2019年の夏にサーニャ谷下流域で広域踏査を行った際に、建築的な特徴からチム一期と思われる遺跡や、一般住居址と思われる遺跡の地表面で見られたパレテアダ文様も、こうした単純な連続幾何学模様が圧倒的に多かった。文様のバリエーションとしては、角型渦巻き、格子、同心円、同心四角、同心菱形、ジグザグ、波などであった。このなかにはエリートにしかアクセスが許されていなかった上記のような工芸品を装飾する際に用いた文様も含まれるため、一部の基本的なデザイン要素（とくに連続幾何学文様に含まれるもの）は明確なエリート／非エリートの区別なく、社会的地位の境界をまたいで使用されたのだろう。各文様クラスの出現時期と出土頻度の分析においてクレランドと島田が主張するパターンが確認できなかったのは、こうした様々な要因が重なった結果なのではないか。また、HPBGにおけるロゴ文様の出土が早い時間に限られたのは、その時期に限って、HPBGに対してランバイエケエリートによる限定的な関与があったことを示しているのかもしれない。今後は、パレテアダ土器全般に当てはまる共通性と、遺跡ごとに変化する個々の状況とを分けて考える必要がある。

6. 結論

大広場出土のパレテアダ土器は、出土コンテキストからも、その他の遺物分析の結果からも、大規模な饗宴において調理・貯蔵用の土器として使用されたことは間違いない。エリートは、自らの祖先を祀った埋葬複合に囲まれた大広場において、社会的ステータスの異なる様々な人々を集めて、祖先を追悼する饗宴を開いた。貯蔵用のパレテアダ土器（大型無頸甕）はアカの醸造に使用され、酒が振舞われたことも明らかになった。つまり、この饗宴は祖先信仰を軸としたエリートによる社会的統合のための場であった。当時最大の祭祀センターであったシカン遺跡の中心部で、エリート主催の大規模な饗宴の跡からパレテアダ土器片が大量に出土している以上、少なくともその流通・使用に関して、エリートの関与を認めないわけにはいかないはずである。エリートが深く関与していたとなれば、「社会的地位の低い粗製土器」という捉え方も改めなくてはなるまい。

これまでパレテアダ土器の生産は、エリートの管理下にあった土器工房跡からそれに必要な道具が出土しないというあくまで状況証拠から、エリートが関与しない世帯レベルで行われていたと考えられてきた。我々もその可能性は否定しない。パレテアダ土器の製作が *nucleated workshop production* と *domestic industry production* のいずれであったかについては現時点では明らかになっていないが、非エリートらによって担われていたと考えて問題ないだろう。しかし、そこからさらに非エリートの間でしか流通しなかった、使用されなかったとするのは大きな論理的な飛躍がある。我々は、非エリートによって作られた調理・貯蔵用土器が、エリートが饗宴を開くたびに奉獻されたと考えている。そもそも、今後の土器工房の調査で製作道具が発見されれば、パレテアダ土器は *nucleated workshop production* に含まれ、「その生産と流通はエリートが後援する監督者によって管理された」という具合に解釈が大きく変化する可能性さえあるのだ。

パレテアダ土器は、決して社会的地位の低い製品などではなかった。この土器に刻印される文様や、文様を構成するデザイン要素のほとんどはランバイエケエリートにまつわる遺物タイプや美術表現に関連して現れるものである。なかには「シカン王」文様のように、エリートそのものがモチーフとなって文様に現れる場合もある。パレテアダ土器文様は、ひとつの美術表現を構成する同時代のデザイン要素だったのであろう。それらの多くはエリートのイデオロギーに直結するモチーフを表したものであり、エリートのアイデンティティを表出するための媒体であったと考えるのが妥当であろう。エリートはこのような土器を様々な社会的ステータスの人々が集まる饗宴において使用することで、自らの地位を誇示したのかもしれない。

最初に述べたように、ランバイエケ文化はきわめて折衷的である。ランバイエケエリートたちは、モチエの世界観や宗教美術を継承し、ワリの埋葬様式を取り込み、カハマルカのカオリン製彩色皿を真似た皿^{註7)}を作った。そうやって在地や周辺地域における既存の文化的要素を巧妙に組み合わせることによって、それぞれの要素に新たな価値を付与し、それらの総体としてのランバイエケ文化を創造した。パレテアダ土器の生産もそうしたランバイエケエリートによる文化的戦略の一部であり、これに自らのイデオロギーに関連したモチーフを刻印させ、社会統合のために非エリートにも招いて開催した大規模な饗宴において使用したのだろう。したがって、パレテアダ土器はエリートの管理外で生産され、非エリートの間でのみ流通していたというのは誤った捉え方で、その多くはエリートのために作られ、用意されたものであった。そして、そもそもこの地方にパレテアダ土器をもたらした者こそが、北方（たとえばエクアドル）に起源をもつといわれるランバイエケエリートであった可能性が高いように思われる。ランバイエケ文化が衰退したのちも連続幾何学模様が刻印されたものが使い続けられたのは、この土器が実用品であり、もともと一般民衆の手によって作られていたことを考慮すれば、決して不可解なことではない。彼らにとって馴染み深い文様を刻印して使い続けたのであろうと推測する。

7. おわりに

パレテアダ土器はこれまで、おもに製作現場での調査をもとに「世帯レベルの労働組織にもとづいて作られ、非エリートの間でのみ流通した社会的地位の低い粗製土器」と捉えられてきた。これに対して、本研究では、使用・廃棄の現場から得られた考古学データを分析・考察することで、パレテアダ土器を新たな視点で捉え直そうと試みた。中期シカン期最大の祭祀センターの中心部に位置する大広場で開かれた大規模な饗宴跡から出土したパレテアダ土器片に焦点を当て、これらの刻印文様や胎土の肉眼分析の結果を、その他の出土遺物の詳細な分析の結果と合わせて考察したところ、従来の捉え方が大きく覆る結果となった。パレテアダ土器はエリートが自らのアイデンティティの表出のために使用した媒体であり、様々な社会的ステータスの人々が集まる祖先追悼のための饗宴において使用された。その流通・使用におけるエリートの関与は明らかで、決して社会的地位の低い粗製土器などではなかったはずである。このように、製作現場から使用・廃棄の現場への研究対象のシフトがパレテアダ土器についての新たな捉え方をもたらした。

ただし、分析や考察の結果、いくつかの重要な課題や問題も浮かび上がった。まず、パレテアダ文様の復元作業は現在も継続中であり、本稿で示した見解は、今後の結果と照らし合わせて、これからも検証を続けていかななくてはならない。また、パレテアダ土器がどこで作られたかという問題については、これまでのように「製作のための道具が見つからないから」という状況証拠ではなく、今後は、直接的に考古学データによって明らかにするべきであろう。そのためには、一部のパレテアダ土器片について、蛍光 X 線分析や中性子放射化分析によって胎土の成分を調べたり、メスバウワー分光分析によって土器の焼成温度を調べたりする必要がある。すでに明らかになっている皿・浅鉢の組成グループとの比較を行えば、少なくともパレテアダ土器が皿・浅鉢と同じ工房で作られていたか否かについては明らかになるはずである。これらの比較分析は今後の重要な目標である。さらに、大広場出土の土器にはワコレイ編年が通用しないために、中期シカン期の細分化が不可能であることなど、土器編年に関する新たな問題も浮かび上がった。これについても今後の課題のひとつとしたい。

【謝辞】

本研究は、(1) 日本学術振興会 (JSPS) 科研費 JP16J09126 (特別研究員奨励費/研究課題名『古代アンデス文明における都市の社会動態についての研究』)、(2) JP17H05109 (新学術領域研究・公募研究/研究課題名『ペルー北海岸シカン遺跡の発掘：人類社会と自然環境の相互作用に関する研究』)、(3) 20H05123 (新学術領域研究・公募研究/研究課題名『シカン遺跡大広場の発掘と景観分析』) の助成を受けたものである。シカン遺跡での発掘調査は、学術系クラウドファンディングサイト *academist* において集まった、大島敏様、川崎浩子様、鈴木弘様、武廣正純様、徳永美暁様、中島寛治様、松本正文様 (五十音順) をはじめとする総勢 96 名の一般支援者によるサポートによって実現した。堆積学的分析については、増田富士雄先生 (京都大学名誉教授) より多大なるお力添えをいただいた。二名の匿名査読者には、修正のたびに原稿の細部まで注意深くお読みいただき、とても適切で有益なご助言を数多く戴いた。また、査読から校正・校閲、校了までのすべての過程において、編集委員の皆様には大変きめの細かいご支援をいただいた。以上、すべてのご支援に深謝の意を表する。

註

- (註1) チャウナーは、「実際には木製のパドルを使ってパレテアダ土器の製作が行われたが、パドルが朽ち果てて残らなかった」という可能性も否定していない。また平石については、自らの手にフィットした平石は陶工にとってとても貴重なものであるため、工房を放棄する際に持ち去った可能性を指摘している。
- (註2) アベヘロ神殿はラ・レチュエ川の洪水によって浸食され、すでに消失している。
- (註3) ロロ神殿の西側麓で見つかった別の墓 (墳墓1 および墳墓2) の直上では、約 400 年にわたって人々が再訪し、地面を燃やしたり、供物を捧げたりした痕跡も見つかっている。また、こうした儀礼的痕跡が見つかった各層から得た土壌サンプルを花粉分析にかけた結果、検出・同定された植物種の繁殖期が2~7月に集中し、儀礼行為には季節性があった可能性が示唆された [松本 2107]。
- (註4) 残りの組成グループ BDP1 はカルシウムの含有率が高かった (2.74~4.38%)。とはいえ、石灰岩や方解石、白雲石、貝殻を混和材に使った場合 (通常5%以上) ほどではなく、デヴィッド・キリック (David Killick) [1990] が指摘するように、もともと混入物の多い粘土が使われている可能性が高い。また、カルシウムの他にもナトリウムやカリウムが多く含まれる。モンテネグロ [Montenegro 1997] によれば、サーニャ谷やヘケテペケ谷出土の海岸カハマルカ土器には雲母と長石が含まれるとのことであるが、ナトリウムやカリウムの含有率の高さが雲母と長石の存在を示すのであれば、BDP1 は外来のものである可能性が強まる。
- (註5) 当研究では、紅星牌の棉料単宣紙 (55×175cm) を使用した。
- (註6) また、文様の多様性が顕著になった一方で、エリア3~5で確認されたのと同じ文様が発掘区2~3でも見つかっている。これは「同一の文様が発掘エリア間をまたいで出土することがなかった」という松本 [2014a] の主張に反するデータであり、こうしたパターンをパレテアダ土器を製造および/または使用・廃棄した人々のクラスター分布を反映したものだとする主張も成り立たなくなる。
- (註7) 「シカン彩色皿 (Sicán painted dishes)」とも呼ばれている。カハマルカではカオリンを使用するが、ランバイエケでは在地の粘土を使用して生産している。また、彩色される文様もカハマルカのものとは大きく異なる。

参照文献

Bankes, George

- 1985 The Manufacture and Circulation of Paddle and Anvil Pottery on the North Coast of Peru. *World Archaeology* 17(2):269-277.

Bennett, Wendell C.

- 1939 *Archaeology of the North Coast of Peru: An Account of Exploration and Excavation in the Viru and Lambayeque Valleys*. Anthropological Papers of the American Museum of Natural History, Vol. XXXVIII, Part 1. American Museum of Natural History, New York.

Cleland, Kathryn M. and Izumi Shimada

- 1994 Ceramios Paletados: Tecnología, Esfera de Producción y Subcultura en el Perú Antiguo. In *Tecnología y Organización de la Producción de Cerámica Prehispánica en los Andes*, editado por I. Shimada, pp. 321-348, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima, Perú.
- 1998 Paletaada Pottery: Technology, Production Sphere, and Sub-Culture in Ancient Peru. In *Andean Ceramics: Technology, Organization, and Approaches*, edited by I. Shimada, pp. 111-150, The University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Collier, Donald

- 1967 Pottery Stamping and Molding on the North Coast of Peru. In *Peruvian Archaeology: Selected Readings*, edited by J. H. Rowe and D. Menzel, pp. 264-274, Peek publications, Palo Alto.

Day, Kent C.

- 1971 *Royal Ontario Museum Lambayeque Valley (Peru) Expedition Quarterly Report*. On file at Royal Ontario Museum, Toronto.

Ishida, Eiichiro

- 1960 *Andes: The Report of the University of Tokyo Scientific Expedition to the Andes in 1958*. Bijutsu-Shuppansha, Tokyo.

Killick, David

- 1990 *Petrographical Analysis of Peruvian Ceramics*. Ms. On file, Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.

Kroeber, Alfred L.

- 1925 The Uhle Pottery Collections from Moche. *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology* 21(5):191-234. University of California Press, Berkeley, CA.

Kroeber, Alfred L. and Jorge C. Muelle

- 1942 Cerámica Paletaada de Lambayeque. *Revista del Museo Nacional* 11(1):1-24.

Lanning, Edward P.

- 1963 A Ceramic Sequence for the Piura and Chira Coast, North Peru. *University of California Publications in American Ethnology* 46(2):135-284, University of California Press, Berkeley, CA.

Lara, Catherine

- 2021 Los “Tallanes” y su Entorno Regional entre 500 y 950 DC: Algunas Reflexiones desde la Tecnología de la Cerámica Paletaada y sus Contextos. Paper presented at the 86th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, April 15-17, 2021, Online.

Lothrop, Samuel. K.

- 1948 Pariñas-Chira Archaeology: A Preliminary Report. In *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*, edited by W. C. Bennett, pp.53-65, *Memoirs of the Society for American Archaeology*, No. 4. The Society for American Archaeology and the Institute of Andean Research, Menasha, WI.

Lyon, Patricia J.

- 1966 Innovation through Archaism: The Origin of the Ica Pottery Style. *Ñawpa Pacha: Journal of Andean Archaeology*, No. 4, edited by Rowe, John H., pp.31-62. Institute of Andean Studies, Berkeley, CA.

Matsumoto, Go

- 2014a *Ancestor Worship in the Middle Sicán Theocratic State*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.
- 2014b El Culto a los Ancestros: Aproximación y Evidencia. En *Cultura Sicán: Esplendor Preincaico de la Costa Norte*, editado por I. Shimada, pp.195-215, Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima, Perú.
- 2019 Was Huacas de Sicán a Pilgrimage Center? From the Results of Compositional Analysis by INAA of Food Vessels from the Great Plaza. In *Ceramics of the Indigenous Cultures of South America: Production and Exchange*, edited by M. D. Glascock, H. Neff and K. J. Vaughn, pp.59-71, University of New Mexico Press, Albuquerque, NM.

Matsumoto, Go, and Gabriela De Los Ríos Farfán

- 2019 Resultados Preliminares de las Excavaciones en la Gran Plaza – Huacas de Sicán. En *Actas del V Congreso Nacional de Arqueología, Volumen I*, pp.43-54, Ministerio de Cultura del Perú, Lima, Perú.

Matsumoto, Go., Gabriela De Los Ríos, Jordi Rivera Prince, Marie Noguchi, y Gabriel Villegas Julca

- 2021 Paisaje Ritual de la Gran Plaza en el Núcleo Ceremonial de Huacas de Sicán. En *Paisaje y Territorio: Prácticas Sociales e Interacciones Regionales en los Andes Centrales*, editado por L. Díaz, O. Arias Espinoza, y A. Yamamoto, pp.115-144, Universidad Nacional Mayor de San Marcos y Universidad de Yamagata.

Montenegro, Jorge

- 1997 *Costal Cajamarca Pottery from the North Coast of Peru: Style, Technology, and Function*, M.A. Thesis. Department of Anthropology, Southern Illinois University, at Carbondale, IL.
- 2010 *Interpreting Cultural and Sociopolitical Landscapes in the Upper Piura Valley, Far North Coast of Peru (1100 B.C.-A.D. 1532)*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.

Shimada, Izumi

- 1976 *Socioeconomic Organization at Moche V Pampa Grande, Peru: Prelude to a Major Transformation to Come* Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Arizona, Tucson, AZ.
- 1990 Cultural Continuities and Discontinuities on the Northern North Coast of Peru, Middle-Late Horizons. In *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*, edited by M. E. Moseley and A. Cordy-Collins, pp.297-392, *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*, Washington, D.C.
- 1994 Tecnología y Organización de la Producción de Cerámica Prehispánica en los Andes. Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima, Perú.
- 2014 Detrás de la Máscara de Oro: La Cultura Sicán. En *Cultura Sicán: Esplendor Preincaico de la Costa Norte*, editado por I. Shimada, pp.15-90, Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima, Perú.

Shimada, Izumi, David Goldstein, José Sosa and Ursula Wagner

- 2003a Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part II: Field Firing Experiments. *Hyperfine Interactions* 150:91-105.

Shimada, Izumi, Kenichi Shinoda, Julie Famum, Robert S. Corruccini, and Hirokatsu Watanabe

- 2004 An Integrated Analysis of Pre-Hispanic Mortuary Practices: A Middle Sicán Case Study. *Current Anthropology* 45(3):369-402.

Shimada, Izumi, and Ursula Wagner

- 2007 A Holistic Approach to Pre-Hispanic Craft Production. In *Archaeological Anthropology: Perspectives on Method and Theory*, edited by James M. Skibo, Michael W. Graves, and Miriam T. Stark, pp.163-197, University of Arizona Press, Tucson, AZ.

Shimada, Izumi, Werner Häusler, M. Jakob, Jorge Montenegro, Josef Riederer and Ursula Wagner

- 2003b Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part IV: Mössbauer Study of Ceramics from Huaca Sialupe. *Hyperfine Interactions* 150:125-139.

Shimada, Izumi, Werner Häusler, Thomas Hutzelmann, Josef Riederer and Ursula Wagner

- 2003c Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part III: Mössbauer Study of Sicán Pottery. *Hyperfine Interactions* 150:107-123.

Shimada, Izumi, Werner Häusler, Thomas Hutzelmann and Ursula Wagner

- 2003d Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part I: Mössbauer Study of Clays. *Hyperfine Interactions* 150:73-89.

Taylor, Sarah Ruth

- 2002 *Artisan Autonomy in the Middle Sicán State: Variability in Mold-Made Ceramic Production*, M.A. Thesis. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.

Tschauner, Hartmut

- 2001 *Socioeconomic and Political Organization in the Late Prehispanic Lambayeque Sphere, Northern North Coast of Peru*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Harvard University, Cambridge, MA.

Zevallos Quiñones, Jorge

- 1990 Introducción a la Cultura Lambayeque. En *Lambayeque*, editado por J. A. De Lavalley, pp.15-103, Banco de Crédito del Perú, Lima, Perú.

丸子真祥

- 2020 『パレテアダ土器の文様からみるシカン』 山形大学人文科学部人文社会科学科人間文化コース人類学プログラム卒業論文。

増田義郎、山口敏、島田泉（編）

- 1994 『黄金の都 シカン発掘展』 TBS、東京。

松本剛

- 2017 「アンデス斉一説にもとづく祖先イメージの再検討—ペルー北海岸シカン遺跡からの発掘データをもとに—」 『古代アメリカ』 20:15-40。

- 2019 「気候変動への儀礼的抵抗—シカン遺跡における人身供犠」 『古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』（青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀編著） pp.268-270、京都大学学術出版会、京都。

What is *paleteada* pottery? From the results of recent excavations and analyses

Go Matsumoto (Yamagata University)
Masaki Maruko (Yamagata University)
Gabriel Villegas (Sicán National Museum)
Gabriela De Los Ríos (Lambayeque Complex Archaeological Project)

Keywords: Sicán/Lambayeque, *paleteada* pottery, stamped designs, elites vs. non-elites, fine vs. domestic pottery

Paleteada is a pottery style that originated in the Piura region of the far north coast of Peru and is used primarily for cooking and storage. The name came from the fact that some design patterns are stamped on the exterior wall of the pottery in the process of being formed by a paddle on which those patterns are engraved. To date, the studies on the Lambayeque *paleteada* pottery have focused mainly on the production site, and from the aspects of production environment and labor organization revealed by archaeological and ethnoarchaeological research, considered *paleteada* as coarse earthenware with the lowest social status that was produced in the domestic sphere and distributed and used among non-elites. At the same time, however, it is known that the stamped designs involve the motifs directly related to the elites' ideology and that some of them have been found only at ceremonial centers so far. Cleland and Shimada [1998: 131-132], who conducted pioneering research on this pottery type, describes this situation as “an intriguing collocation of what is regarded as the most ideologically charged of Sicán (Lambayeque) images with the humblest class of pottery” (added by authors in the parentheses), but there has been no discussion in detail about its theoretical implications.

In our recent excavations at the Great Plaza located in the center of the Sicán Archaeological Complex, which was the largest ceremonial center during the Middle Sicán period (AD 900-1100), we recovered a large number of *paleteada* sherds from the large-scale feasting contexts. Our detailed analyses of the excavated materials suggest that the feasts were held by the Lambayeque elites to commemorate their ancestors enshrined in their mortuary complexes that surrounded the Great Plaza [Matsumoto 2014a, 2014b, 2017]. The shift of our research focuses from the production site of *paleteada* pottery to the places where it was used and discarded has now urged us to update our conventional view on *paleteada* as “non-elite pottery” and to acknowledge the elites' intervention at least in its distribution and use.

Furthermore, our reconstruction of the stamped designs led us to suggest that *paleteada* pottery was not distributed and used only among the non-elites, but many of them were rather produced and prepared for the elites. We suspect that the pots made by the non-elites were dedicated every time a feast was held by the elites. The stamped images on those pots were contemporary design elements, all of which could constitute a single artistic expression, and the pots themselves were used primarily by the elites as a medium for identity expression.

原稿受領日 2021年6月24日
原稿採択決定日 2021年9月30日

